復讐王リチャード

神城匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐王リチャード

【Ｎコード】
Ｎ４７６４ＢＡ

【作者名】
神城匠

【あらすじ】
母を父に殺され、父に見捨てられた少年リチャードは、父の死後、その王国を受け継いで国王リチャード一世となる。そして彼は、王の力を駆使してこれまでの人生で自分を苦しめてきたありとあらゆる人間を根こそぎ殺すという、とてつもない復讐作戦を開始した。仇や悪党を殺して殺して殺しまくり、ついに父が作った国をも踏みつぶしたリチャード王は、新たに自分の理想とする王国作業に取り掛かるのだが、反乱や他国による侵略が相次いで……。
復讐だけでなく、国造りなどの内政要素や恋愛要素もあり（予定）。

1：復讐王誕生（前書き）

別作品を連載中なのに書き出してしまいました。すいません。
この作品は、要するに私の妄想を小説化したものです。腹の立つ上司や先輩をぎゃふんと言わせるにはどうしたらいーかなーと考えていたら、こんなアイデアが浮かんできました。

1：復讐王誕生

これはもしもの話である。

もし、王様になれるとしたら、真っ先になにをするだろうか？
そんな質問があったとして人はどう答えるであろうか。

思う存分、贅沢三昧な日常を過ごすと言い張る者もいるだろう。

あるいは、国中の美人をかき集め、ハーレムを作り、女狂いの毎日を送りたいと思う者もいるに違いない。

さもなくば、王でなければできぬ遊びを心行くまで満喫したいと考える者もいたって不思議はなかった。

真面目な者であれば、政治や軍事に勤しみ、民や国のために粉骨砕身頑張ると答えるかもしれない。さて、君はどうだったであろうか。

今年で十五歳を迎えるアルフォード王国のリチャード一世はそのいずれでもなかった。

期せずして国王の座に就いたこの少年は、王になる前の彼を苦しめてきた全ての人間に対して辛辣に悪辣に徹底的に報復していったのである。

要するに、この少年が、王になって真っ先にやったことは、復讐であった。

元々、リチャードという少年は、一応王の子として生まれたものの、長男ではなかった上に妾の子だったから、徹底的に不遇な人生を歩んできた。彼を産んだ母は、農民の娘の分際で恐れ多くも王の子を産み落としたという罪で処刑され、彼自身は、生きながらに棺の中に入れられて王都の側を流れる大河に流されたのだ。それだけではない。死ぬ寸前だった彼を間一髪で助け出し、五歳になるまで育ててくれた猟師も、王が課した理不尽な重税を払わなかった罪で火炙りの刑に処されて死んでしまった。

六歳の時、ひょんなことで彼の出自が判明し、父王に謁見することができたが、その時の父王の一言がこれであった。

「目障りじゃ。殺せ！」

このときは、王の寵愛を一身に受けていた貴妃の熱心な助命嘆願があったので、生命だけは助けられたが、その貴妃も、一年後には王の寵を失い、さらに半年後には他ならぬ王の命令によって処刑されてしまっていた。

その彼も、王宮ではほとんど召使同然の扱いを受けていたが、貴妃の失脚後、王宮からも追放されて文字通りの乞食とならざるを得なくなった。

以後の彼は、とてつもなくどん底の生活を送り、ありとあらゆる辛酸をなめてきた。

そして、

王が危篤状態に陥ると、彼は王の勅命の名の下に再び王宮に呼び戻され、即日、王子の称号と王太子の地位が与えられることになった。

それから二日後、王が崩御すると、彼は自動的に国王となり、そして、早速復讐作戦を開始したのであった。

即位からたった二日目の王がやったこと。

政治でもなければ軍事でもないし、まして贅沢に走るわけでも女に耽るわけでも酒浸りになるわけでもなく、復讐。

全く持って前代未聞の王であるが、その手口も、王というよりむしろただの悪党という感じで、王国の重臣たちが眉を顰めるに十分すぎるものであった。

即位二日目の朝。

リチャード王は近衛兵二〇〇あまりを率いてアルフォード城を出

ていった。重臣たちには、ただ気晴らしに城下を突っ走ってくるとだけ言っておき、実のところ彼が向かった先は、王になる前に暮らしていた小さな村であった。

王家伝来の鎧と深紅のマントに身を包んで、白馬に跨り颯爽と姿を現したリチャード王の風格は、およそ一五歳の少年とは思えぬほど圧倒的であった……と、後世の歴史家は伝えているが、その彼の口から飛び出した言葉に、村長は驚いた。

なぜならば、

「前の村長とその取り巻き連中。即ち、ここに列挙した者どもを悉く余の前に引っ立てよ。例外はない。後、三〇分で全員を引きずり出せ。さもなくば、村全土を焼き払い、老若男女を問わず皆殺しの刑に処してくれる！」

こんな内容であったからである。

だから村長たちは慌ててすっ飛んで行き、名簿に記された人間の全てを王の御前に引きずり出し、献上した。

一方、怒る王の御前に引きずり出されてきた者たちは、何がなにやらさっぱり分からぬといった様子で、困ったようにリチャード王の顔色をうかがったりしていたが、その王が、かつて村の片隅で卑屈に暮らしていた乞食のリチャードだということに気づくと、その顔色はたちまちのうちに一変していった。

昔馴染みの若き王。

ならば、恩賞の一つも出るかもしれないと、たわけた期待を抱い

たのである。しかし、彼らのその期待は、他ならぬ若き馴染みの王の口によって完璧にへし折られ、逆に絶望のどん底に突き落とされることになった。

リチャード王曰く。

「さて、貴様たちには散々お世話になってきた。此度はその礼を言いたくて参ったのだが、一つここで皆より受けた御恩とやらを逐一説明してやろう。

まず、前の村長たるロバート・ヘストン殿だが、貴殿のその尊大にして卑怯極まりない性格のおかげで、俺は唯一の親友にして家族だった少女エレンを失った。貴殿はかつて、若干の金欲しさに村に巣食う親なき少女を根こそぎ奴隷商人たちに売り払ったことがあるだろう。エレンもまた、貴様によって売られた女の一人であった。あの歳で、徹底的に辱められた彼女は、人生に絶望した挙句、自ら毒を呷って死んでしまったよ。

そのヘストン殿の御嫡男たるヘンリー殿。貴殿は、この私が食うに困ってほとんど餓死寸前の状態にあった折、わざと毒饅頭を喰らわせ、俺の苦しむ様を子分たちと一緒に楽しそうに見学してくれたな。俺は辛うじて九死に一生を得たが、あの時の毒のおかげで頭痛持ちになってしまった。

そのほかの者も、俺が稼ごうとしたら、それを徹底的に邪魔してくれたり、税金だとか抜かして稼ぎを根こそぎ奪い取ってくれたり、他にも汚いだの臭いだの、散々に罵ってくれたな。貴様たちから浴びせられた罵声の数々は、今でも忘れられぬ。

だが、勘違いはしないでほしいんだ。全く持って、貴様たちには

感謝しているんだよ。

貴様たちが俺を徹底的に虐め抜いてくれたおかげで俺には忍耐力がついた。そして、俺はついに王になった。全く、君たちが忍耐することを教えてくれたおかげだ。さもなければ、俺は父に召しだされ、王の座を継げと言われた時、冷然と拒否していただろう。そして父を殺していただろう。だが、俺は耐えた。耐えれたんだよ。貴様たちのおかげでな。その感謝の気持ちを込めて、貴様たちにはとっておきの褒美を用意してある。受け取ってくれたまえ」

全てを言い終わった時、王は軽く手を振り上げた。

兵はそれに応じて俊敏に動きだし、たちまちのうちに哀れな生贄たちを次々と取り押さえ、村の広場に設けられた即席の処刑場へと連行していった。

「い、命だけは……」

「お願いだ。助けてくれ」

「昔のことはすまなかった。心を入れ替えるよ。助けてくれ。命だけはとらないでくれ」

誰もが口ぐちにそんな風に叫んで、王に許しを請うている。

しかし、リチャード王の怒りはその程度で収まるものではなく、

「もう遅い。せめて後一年前にその弁明があれば、余は貴様らをこんな目には遭わせなかっただろう。だが、今更遅すぎる。この俺を虐め抜いたこと、とっぷりと後悔した上で、潔く死ね！」

その言葉は徹底的に冷酷さに満ちていた。

いずれにしても、王の宣告は下ったのだ。

処刑執行人は哀れな受刑者たちの首に縄をかけ、全ての準備が終わると、王に目配せし、その旨を伝える。

「では、執行しろ！　その薄汚いクズどもをこの世から葬り去れ！」

リチャード王の厳命が飛び、

次の瞬間、

王の恨みを買っていた多くの村人たちが、悉く空に舞い上がり、そして苦しみもがきながらバタバタと死んでいった。

リチャード王の復讐作戦は、それだけでは終わらない。

ある時は、王宮に連行してきて、自らの手で処刑することもあった。

ある時は、殺すのではなく奴隷の身分に落とし、生きながらの死を命じることもあった。

新王リチャード一世の名は、血生臭い復讐王として、王国臣民のうちで知らぬ者は一人もいなくなった。それでもリチャードは、殺すのを止めなかった。

当然、政治もそっちのけで復讐ばかりやっている王に、不審を抱く者も現れる。

彼には王たる資格はない。このままでは、王国が潰れてしまう。

切実に心配し始めた者たちの一部は、王への諫言に励み、大多数は王へ反旗を翻す道を選んだ。そもそも彼らは、農民の娘の子として生まれたがゆえに冷遇され続けてきたリチャードを国王として認める気がなかった。とりあえずこれまでは他に適当な候補がいなかったために仕方なく王として仰いできたが、王となって以後の彼の態度を見る限りにおいて、もはや王と仰ぐことは不可能と考えた彼らにとって、反乱は当然の選択肢であり、かつ彼らにとってこれは決して叛乱ではなく正義の挙兵なのであった。

こうして、リチャード一世の波乱に満ちた人生が幕を開けた。

父に見捨てられ、母を殺され、孤児として十五歳になるまで生き続けてきた少年の、これは崖っぷちからの再スタートであった。

1：復讐王誕生（後書き）

感想、評価、お待ちしています。

2：初陣

復讐王リチャードにとっての最大の復讐とは、言うまでもないことであるが、亡き父の名を徹底的に穢し、貶め、その存在そのものを完全否定することにあった。

彼にとって父とは、尊敬に値する？父親？では絶対的にあり得なかった。なぜなら、父は遊び半分に母を強姦し、その結果、子を孕むと容赦なくおろすように迫り、断られると冷酷無慈悲に殺した悪魔だった。それだけではなく、生まれてきた子、即ちリチャードをも殺そうとし、さらには彼の恩人たちを次々と殺していった憎むべき獣であったのだから。

リチャードが幼くして徹底的に不遇だったのは全て父王のおかげと言ってよく、父王最期の願いである王位継承を引き受けたのも全て父王に対して復讐を果たすためであった。

しかし、問題は方法である。

既に父は死んでいる。ということはもはや父に直接手を下して殺すことも、因果を言い含めて苦しめてやることもできないわけだ。ならば、父が必死になって守ってきた王国をこの手で潰してやろうか、とも思ったが、それでは己の身にまで危害が及ぶ。父に対する復讐を果たせたからとて、己が死ぬなどと言う結末は全く望んでいないリチャードにとって、王国滅亡は論外だった。

ならば、王国の覇権を完全に握り、独裁者として君臨した上で、

父王の業績や評価を根本的に否定してやればよい。父王が作った全てのものを叩き壊し、父王が愛した全てのモノをぶち壊す。父王には、愚鈍で無能で暴君だったという最低の評価を下し、それを広めていく。

権力さえ握ってしまえば、後はどうとでもなるのだ。

だが、権力を完全掌握するまでは、即ち、父王に従っていたゾンビの如き老臣どもを何とかしない限り、この計画は成就できない。今ここで父王の完全否定を始めても、老臣たちが納得しないだろうし、老臣たちが納得しなければ廃位されることもあり得るのである。

せっかく掴んだ王の座。

これを手放すことはできない。

都合がいいことに、早速叛乱が起こった。

まあ、正直なところ、即位してまだ一週間足らずのこの時期に起こされた叛乱は誤算以外の何者でもなかったのだが、しかし、叛乱を潰すことができれば、邪魔者は消えたも同然。権力はおのずから王たるリチャードの手のうちに戻るだろう。

だが、問題はこの叛乱の規模が大き過ぎることであった。

何しろ叛乱軍には、王国に臣従する全諸侯のうち、八割以上が参加しているのだ。農民の娘の子というだけで既に尊敬するに値しない上、即位するなり民を殺しまくっている王に従う義理も意味もない。そう主張する諸侯連合軍には、それなりの大義があり、結構な数の民がこれに味方した。

一方、リチャードのもとに集まったのは、仮にも国王たる御方に叛くは無理と考える律儀な諸侯たちで、正直なところ、彼に対する民衆の支持は余り高いものではなかった。

さて、どうしよう。

若き少年王リチャードは考えた。

相手の軍勢は三〇〇〇騎を超えると言うが、こちらは四〇〇騎もあればいい方だった。

このまま戦っても、勝ち目は薄い。

そこで、リチャードは決意する。

正攻法は無理。

正面決戦など自滅行為。

ならば不意討ちによる敵の混乱を突いた奇襲攻撃以外に選択肢はない、と。

「なりませんぞ。それこそ自殺行為。籠城しか手はありませぬ」

と、王に従う諸侯たちは、そう言って若きリチャードを諌めにかかった。

「籠城？　なにをたわけたことを言うんだ。援軍のない籠城戦にいったい何の意味があるっていうのだ。じり貧になって滅びを待つだけではないか」

しかし、リチャードはまるで聞く耳を持たなかった。

それでも諸侯は奇襲作戦には反対し続けた。それは卑怯だ。騎士の風上にもおけぬ行為だと主張する者もいた。

リチャードは聞かなかった。

「もういい。議論はこれまで。俺は寝る」

そう言って彼は評定の間より姿を消して、寝室の方へと逃げるように戻っていった。

夜。

誰もが寝静まったころにリチャードは起き上がり、側に控えし近侍に向かって、

「兵を集めよ。ホラ貝を鳴らせ」

そう叫んだかと思うと既に彼は颯爽と走り出していた。

そして、白馬に跨り、鎧兜を着込んで、城門を守る番兵にこう言った。

「門を開けよ」

と。

「こ、国王陛下。し、しかし、城門は断じて開けるなと、ご老臣方のきつい御命令でございますが」

番兵は困ったように、猛り狂う若き王を見上げていた。

「なに？　老臣どもの命だと？」

王に問われ、

「は、はぁ」

番兵たちは力弱く頷くだけだった。

「ならば構わぬ。余は王ぞ。この国にあっては王の命令が全てに優先するはず。それともなにか、その方たちは王たる余の命に叛くの

か？」

リチャードは一五歳の少年だ……と言ってもその鋭い眼光で睨みつけられて緊張せぬ者は一人とていなかった。そこはさすがに幼きころよりあらゆる苦難を乗り越えて、王の座まで辿りついた少年である。

「では開けよ」

今度こそリチャード王の命令に従い、番兵たちは門を開けた。

王の命令だ。ならば仕方ない。責任は王にこそあって自分たちにはないのだ。

と言いたげな視線を完全に無視して、リチャード王はたった一人で駆けだした。

「おーい、おーい、王よ、王よ」

一心不乱に単騎で駆けていって、ようやく近くの小さな寺院に辿りついた時のこと。

リチャード王は、どこからともなく響いてくる己を呼ぶ声に対し、

面倒臭そうに振り向き、その姿を確認するや否やハァとため息を吐いた。

「たった一人でいったい何をする気だい？　まさかそのまま敵軍に突っ込む気じゃないだろうね。君は昔っから喧嘩っ早いところがあるけれど、王になっても相変わらずか？」

そう言っているのは、ティアナ・エフラー。

リチャード王の悪友の一人で、いわゆる喧嘩友達。

女だてらに不良少年たちを束ねて暗黒街の総帥になっていたというとんでもない少女で、リチャードが即位する前まで、彼とは喧嘩ばかりして過ごしていた。

「喧嘩っ早いだと？　貴様にだけは絶対に言われたくない台詞だな」

そう言って笑う王に、

「ま、確かにね。でも君だって大概だったろう。まあいいや。君も兵がいるだろうと思ってね。手下を大勢従えて、只今馳せ参じましてございますよ」

ティアナはらしくない大仰な態度で平伏してから、ぱんぱんとおもむろに手を叩いた。

すると、

わらわらと大勢の有象無象が姿を現し、彼らはどいつもこいつも下品な笑みを浮かべて、王の顔を見つめていた。

「これが王かい？」

王の権威など、全く理解していない獣のような大男は、白馬の上に跨る凛々しき少年王を舐めまわすように見つめていた。

「やめときな。このバカ王はな、怒らすと桁外れに怖いんだぞ。それに強い。お前たち程度じゃ軽く殺されちまうよ」

そこへティアナが口を挟む。

少年王リチャードは気にする素振りも見せずに、至極面倒臭そうに夜空を見上げた。

「で、お前たちは余の奴隷として死ぬ覚悟があるのか？」

そして、彼は言う。

「覚悟？　ならば君は死ぬ覚悟で働いた奴隷に報いる覚悟はあるのか？」

すかさずティアナが言い返す。

「ん？　ま、働き次第だな」

「抜かしたな。じゃ、なんだってくれるんだな」

「ああ、働き次第でな」

きっぱりと頷いてみせるリチャード王に、

「聞いたか、皆。この王は実に気前がいいぞ。我らの働き次第によっては、王国だってくれるってさ」

ティアナはそんな風に叫んでみせた。

そして、彼女は改めてリチャード王に目をやり、

「だよな、国王陛下」

にやりと不敵に笑うのである。

リチャード王とその下品な仲間たちは、健やかに睡眠中の敵軍陣営に文字通りの夜襲を仕掛けた。

白馬に跨りし勇壮な王自らが先陣切って突っ込む様は、まさに見事なものである。

思わぬ奇襲に混乱状態に陥った諸侯連合軍は、なすがまま、王の手勢に徹底的にやられていたが、まあ数的には圧倒的に有利なわけで、時間を経ると、次第に態勢を立て直していき、今度はリチャード軍の不利が際立ってきた。

そこへ、

リチャード王出陣の急報を聞いて驚いた王の家臣たちが、ようやく到着し、諸侯連合軍に突撃を敢行したのである。

これには、連合軍もたまらなかった。

大混乱に陥り、統制を完全に喪失した連合軍将兵は我先に逃亡を始め、ここにリチャード王の勝利は決した。

そして、王の御前に叛乱を企てた有力な貴族たちが連行されてきた。

王は、床几の上にでんと構えて、バカな彼らをじろりと見下ろしている。

「陛下、如何なさいますか？」

と、老臣たちが問うので、

「殺せ」

王は淡々と命じた。

3：何もかもぶっ壊す

燃えている。

国の全てが燃えていた。

城も町も村も田園風景も……。

何もかもが、燃えていた。

「ははははははははははははははははははははははははははははははははははは」

地獄の光景を前にしてリチャード王は壊れた人形の如く高笑いしていた。

「全て燃えよ。全て灰と化すがよい。ははははは。全て燃えてしまえ。ははははは。こんな国、こんな王国、いっそ全て燃えてしまえばよいのだ。その上で余が新たな国を作ってやる。ははははは」

響き渡る悲鳴。

老若男女を問わぬ多くの人々による断末魔の叫び。

それはまさに阿鼻叫喚の地獄絵図であった。

そして、リチャード王はそれを見ながら笑っている。

そんな彼を見て、老臣たちはごくりと息を呑んだ。

「余に逆らった奴は皆殺しだ。余を苦しめた奴も悉く皆殺しだ」

その時、燃えている城の中から、逃げ出してきた女子供の一団がある。

たちまちリチャード王に報告が入る。

叛乱軍に加わっていた不届き者の眷族なれども、相手はとるに足らぬ女子供。殺すには及ばないのではないか、と老臣たちは主張していたが、

「その女子供の身分は？」

王が問うたのは、そんなことであった。

「どうやら、敵の重臣たちの妻子のようにございます」

老臣たちは恐る恐る答えた。

「なるほど。ならば殺せ」

「え？」

「え、ではない。余は皆殺しにするよう命じたはずだ。女子供であれ例外はない。まあ、領主によって半ば強引に城内に連れ込まれてしまった哀れな民衆であれば助けてやっても良いが、それ以外は例外なく殺せ。余に楯突いた者がどうなるか、その身を持って思い知らせてやれ」

少年王は、きっぱりとそう言ってから、躊躇う老臣たちをぎろりと睨みつけ、

「その方たちも、余の命に叛くか？」

と、尋ねた。

「い、いえ……」

先王の時代、彼らは王国の重臣として相応の力を持ち、王からも敬意を払われていた存在であった。しかし、二週間程度前に即位したこの若き少年王は、彼らに対し何らの敬意も抱いてはいない様子なのだった。

そして、そうした少年王の？増長？に対して老臣たちは何も言えなくなっていた。何しろ、この少年王は、国内諸侯の八割以上が参加した王国歴史上最大規模の内乱をあっという間にねじ伏せ、その類まれな実力を満天下に見せつけた。その過程で、彼は不良少女ティアナ・エフラーに代表される有象無象を私兵として迎え入れ、強力な親衛隊を結成し、その軍事力は当初から少年王に味方していた少数の諸侯たちの力をすでに超えていた。

即位から二週間程度しか経ていないとはいえ、今の少年王には、諸侯たちに遠慮する必要性も義務も全く持ち合わせてはいなかったのだ。そして今、リチャード少年王の周りには、阿修羅の如き形相をした美少女ティアナ・エフラーと、彼女の手下たちが完全武装して屹立し、少年王に楯突く者あらば、即刻処刑すると言わんばかりに殺気を漲らせていた。

「で、王よ。これからどうするんだい？」

そのティアナが、老臣たちに代わって少年王リチャードに尋ねた。

「文字通り、全部燃えてるぜ」

炎上する敵の城。

その炎は、たちまち、国中に広がり、これが鎮火した頃には全てが灰と化し、何も残っていないのではないかと思われるほどであった。

「なーに、気にするまでもない」

それに対し、リチャード王は楽しそうに腹の底から笑いだし、そしておもむろに歩きだした。

「余……俺はな、こんな王国にクソほどの未練もないんだよ。俺の実の父親ってやつは、そしてここにいる者どもは、俺の母を殺し、俺を殺そうとし、さらには俺を助けてくれ育ててくれた親父殿を殺し、挙句、俺を救ってくれた多くの人たちを殺してくれた。こんな王国のどこに愛着を抱く必要性があるんだ。なあ、老臣どもよ。貴様たちには余の気持ちが痛いほど理解できるだろう」

彼は、苦り切った顔をして頭を下げている老臣たちの肩や頭をぽんぽんと叩きながら、最後にティアナをぎろりと睨みつけた。

「まずこの王国は更地に戻す。そして、新たに俺の王国を作り上げる。俺の父たる先王が守ってきた王国を、何でこの俺が引き続き守ってやらねばならんのだ。父王が必死こいて守ってきた王国ならば、

俺としてはまずは壊すだけだ。そして、全く違う国を作る。それこそが、父王より受けた大恩に報いる道だろう」

我ながら、壊れているな、とは思うのである。

しかし、少年王は全身に漲る怒りのパワーを今さら体の内に封印してしまう気は全くなかった。これは、彼の幼いころからの夢なのだ。もし、自分が仮にこの国の王の座に就くことあらば、王として、国の全てを壊してやる。城も町も村も田畑も民さえも……。

自分や母や大切な人々を助けなかった王国や民に、未練などない。自分を見捨て、多くの少年少女に乞食の生活を強いてきたこの腐った国は、一度土に還り、一からやり直すべきなのだ。

「で、これが王たる余の基本方針なのだが、異論はあるかい？　特に、父王を支え、王国に忠節を捧げ、大功ある老臣どもの御意見を伺いたいが？」

リチャード王は、再び玉座の上に戻り、悠然と腰を下ろした。

厳かに輝く王冠と、シルクの王衣が、復讐に全身を焦がす少年王リチャードの圧倒的雰囲気と見事にマッチし、おぞましいほどの迫力を漲らせていた。

そして、リチャード王がサッと手を振り上げる。

すると、待っていましたと言わんばかりにティアナとその手下たちが剣を引き抜き、さらに、陣幕の向こうからも大勢の有象無象が完全武装したまま突入してきて、老臣たちを完全に包囲したのである。

その上で、

「さて、貴公らの御意見を聞きたい。心おきなく申せ。貴公らは、余の決定に異議があるか？　あるならば申せ。なーに、どんな意見であれ、余は特に何もしないさ。余は、ただこの国を滅ぼしたいんだよ。余は、この王国を一度無に戻したいんだよ。簡単なことさ。場合によっては、お前たちの身分を剥奪し、領地を奪うこともあるかもしれないが、それはお前たちの心がけ次第だよ。父やお前たちが必死になって守りぬいてきたこのくだらない王国を徹底的に踏み潰して、俺流の王国を作り上げる。誰も俺のような苦しみを味わわずにすむような世界。誰もこいつらのように幼いころから苦しい思いをせずにすむような社会だ。俺ならば作れるよ。貴様たちには無理だ。で、貴様たちの御意見を伺いたいんだ？　一応、政治家としては君たちが何十年も先輩なわけだからね」

武装した親衛隊に包囲させ、その上で問いただしているのだから、全くもってフェアではない。

しかし、そんなことはリチャード王とて百も承知。分かっている上で、彼はこんなことをやっているのだった。

すると、老臣の一人が恐る恐る口を開いた。

名を、ハル・ノートと言う。伯爵位を持ち、王国では、宮内卿の要職にある。今回の内乱では、出自や態度、年齢はどうあれひとたび王冠を戴いた以上は、リチャード王こそがアルフォード王国の正統な国王陛下であり、その王に楯突くは臣下の道に非ずと主張し、圧倒的に劣勢だったリチャード王に味方して律儀に兵を率いて参戦した男であった。先の決戦においても、リチャード王出陣の急報を

聞いて、真っ先に駆けつけ、突入した勇士で、老臣衆の一人に名を連ねてはいるが、年齢はまだ四〇歳になったばかりだった。

「畏れながら国王陛下に申し上げます。陛下のお気持ちは尤もなれども、しかし、全てを無に帰し、全てを滅ぼしては、陛下の如き境遇の御方を無数に増やすだけにございます。彼らの心のうちには憎しみが宿り、それが再び戦乱を呼び寄せることになるでしょう。……確かに我が王国にはいろいろな問題点があり、それを治すために抜本的改革を施さんとする陛下の御意思に、臣は大賛成にございます。全力で補佐いたしますが、全てを焼き、全てを壊し、完全に一から始めるとの御意思には賛成いたしかねまする」

と、ノート伯は言い切り、リチャード王とその取り巻きたる不良少年少女たちを睨みつけた。

「ほぉ、それが伯の意思か？」

王はにやりと不敵な笑みを漏らし、それに合わせるかのようにティアナたちの瞳に最大限の殺気が籠った。

「無論です。あるいは、陛下が民にはこれ以上、危害を及ぼさぬと仰せなのであれば、全てを無に帰し、一から始め直すという御考えにも賛成いたしましょうが、民に危害を及ぼし、民に苦しみを与えるのであれば、例え殺されるとしても賛成いたしかねます」

「……民に危害、か。それは確かに余の意思とは違う」

少年王はぽつりと呟き、そして静かにため息を吐く。

「だが、いずれにしてもそなたは余に全面的に従うことはできぬと

いうわけだな」

そんな王の問いに、

「御意」

恐れることなくノート伯は断言した。

すると、リチャード王はスクッと立ち上がり、

「この不届き者を拘束せよ。余の意思は絶対。例えどんな命令であれ従うのが臣の道だ。従えぬとは即ち反逆だ。拘束せよ」

声高に叫び、そしてティアナたちはそれに応じてノート伯の身柄を素早く拘束してしまった。

ノート伯は、それに対して特に何も言わなかった。殺したくば、殺せばいいと、既に覚悟は決まっているようなのである。

そんなノート伯を見て、リチャード王はにやりと笑う。

「で、他の者に問う。そなたらはどうだ？」

目の前で、王に異を唱えた者が拘束され、今にも殺されそうな状態に陥っている。室内には、王にだけ忠誠を誓う親衛隊が犇めき、逃げ出すことは不可能……。

ともなれば、他の老臣たちに異を唱える余地などあろうはずもない。

事実、多くの老臣たちが、次々と王への絶対的な忠誠を誓っていった。まあ、それでも数人の気骨溢れる老臣たちは、己の正義に賭けて、王が暴君と化すのであれば盲従はできぬと言いのけたが、大半の者は王に忠誠を宣言することでこの場を凌ごうと必死になっていた。

そして、全ての老臣たちが言い終わった時、

リチャード王はこう言った。

「さて、その方たちの覚悟のほどは良く分かった。どいつが余のためになり、余のためにならぬかということも良く分かった」

そして、王はティアナに視線を投げた。

「承知」

ティアナは、その美しい顔をおぞましく歪ませ、ゆっくりと歩き出した。

王の意を受けた彼女がいったい何をしでかすのか。

誰もが息を呑んで彼女の一挙手一投足を見守る。

彼女は、拘束されている老臣たちのもとに歩み寄り、剣を引き抜いた。ニタニタと笑いながら、全身から殺気を漲らせている彼女を見て、ハル・ノート以下の老臣たちは己の最期を覚悟した。

だが……。

ティアナの剣が無機質に輝いた時、

彼らは特に痛みらしいものを感じなかった。

「な？」

彼女の剣は、彼らの体ではなく、その周りにとりついていた縄を斬り落としていた。

「ふふふふ。はははは。はっはっはっはっは。案ずるな。余は、貴様らの如き分からず屋を殺すような度量の低い男じゃない。貴様らの如きバカには、余の実力で、余の力を認めさせてやらねばならぬ。それでこそ余は真の王になれるのだからな」

王は高笑いし、そしてついでのように、自らへの盲従を誓っていった老臣の方へと目をやった。

「で、そなたたちだが、貴様たちは使いものにならんな。どうせ余への臣従も、今この場をやり過ごすためなんだろう？　所領に戻れば余への反逆準備を進めるに決まっている。そんな危険分子を、余が逃がすと思ったか？」

「え……？」

「余の目は節穴ではないぞ」

少年王リチャードは、再びスクッと立ち上がり、おもむろに王家伝来の黄金の太刀を引き抜いた。

「この剣で貴様らを殺してやる。あり難く思うがよい」

そして、彼は歩きだす。

しかし、

「陛下ッ！」

叫びながら行く手を阻んだのは、ノート伯である。

「なんだ、お前は助けると言ったばかりだろう」

王はため息交じりにぼやいた。

「なりませぬ。なりませんぞ。仮にもこの者たちは、陛下の不利を知りながらも陛下のもとに馳せ参じた忠義の者。陛下や王国への忠誠心ならば、それがしなど遙かに凌駕する律儀者どもでございます。その者たちを殺しては、陛下の度量の狭さを他国に笑われることになりましょう。そんな度量の狭い御方の作る新たな国に、誰が住みたいと思うでしょうか」

「……」

「それでもこの者たちを殺すと仰られるのであれば、まずはこの私から殺しなさい。さあ、その黄金の太刀にて、私の胸を一突きになさいませ。王家伝来の秘宝にて殺されるとあらば、本望にございまする！」

「……」

「陛下、さあ、如何なされるか？」

気迫に満ちたノート伯の諫言は、リチャード王の殺気を削ぎ落し、暴虐なる牙を引っ込ませるに十分なものであった。

王は困ったように苦笑いしてから、再びティアナに目をやった。

その彼女は言う。

「潮時ね」

と。

「分かったよ。ノート伯の言う通りだよ。俺の負けだぁ。伯に免じて、生命は助けおくし、ここにいる全員の身分は安堵してやるよ。恩賞だって公平に分け与える。これでどうだ、伯！」

もはや開き直るかのように叫んで見せる若き王に、

「それでこそ我らが国王陛下！」

ノート伯は大仰に、心の底から、平伏してみせた。

その後、城は落ち、

アルフォード王国の内乱はあっけなく終わった。

しかし、国中が燃え上がり、

町は壊れ、

村は滅び、

多くの民が死んだ。

復讐王リチャードによる、国造りは、今まさに始まったばかりであった。

3：何もかもぶっ壊す（後書き）

次回から内政編。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4764ba/

復讐王リチャード

2012年1月14日09時46分発行